

二次元ぷち文庫

続
贗
の学
園

弄ばれた絆

三津谷鷹介

表紙イラスト：
どうーゆーうおんとうー

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『続・贄の学園 -弄ばれた絆-』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ぶち文庫『贄の学園 -受け継がれた縛鎖-』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



続・

美丸の学園

—弄ばれた絆—

三津谷鷹介

表紙 / どう〜ゆ〜うおんとら〜

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

せしま

瀬島ゆかり

学園の平穏を保つ為の贄とされてしまった少女。普段は読書の好きな大人しい少女。

やなぎくにひろ

柳木邦弘

ゆかりのクラスメイトでほのかにゆかりの事を想いを寄せていたが、裏の儀式の現場を目撃してしまい事態に巻き込まれるも、どうにかゆかりを救い出そうと画策する。

六月　—視辱に酔う老怪—

低く小さく、弾けるような音を立てながら鉛色の雨が降り続いている。

ガラスにべたべたと張り付き、窓越しでも肌を不快に湿らせるようなその水滴の群舞を、瀬島ゆかりは窓際の席で見るともなしに見続けていた。

昼休み。

机の上には文庫本を拡げているが、視線を落としても目は活字の上を滑るだけで、内容などはまったく頭に入っていない。

好きだった読書だけではなかった。最近では、授業を受けていても、自宅にいる時も、心をどこかに置き忘れてきてしまったように呆然と黙り込んでしまう事が少なくない。

もとより内気で引つ込み思案なところのある少女だったため、周囲の者もそれほど違和感を抱いてはいないのだが、そんな時の彼女は、一瞬まるで意志を持たない人形のように見えるのだった。

「お、おい、馬鹿、危ねっ！」

「!？」

ガタツ、という大きな音と共に、突然ゆかりの後ろから、一人の男子生徒が倒れかかってきた。外に出られないうっぷんを教室内でじゃれあつて解消しようとしているうちに、

ついでが過ぎてしまったようだった。

少女の顔にぶつかりそうになった少年は、とつさに両手を突いて身体を支えようとする。そのうちの片方が、ゆかりの肩にかかった。

「……っはあっ！」

押され、体勢の崩れた少女の唇から、小さいが艶かしい、喘ぎのような吐息が漏れる。

「ちよつとおー、気をつけなさいよ！」

「わ、わりい」

危うくゆかりを押し潰しそうになった少年は、外野の女子生徒からの非難にきまり悪げに詫びながら身を起こした。

「もう。危ないでしょ。瀬島さん、大丈夫？ けが、してない？」

「うん、平気だから……」

ゆかりはうつむいたまま傾いた机の位置を直し、ぽつりと答える。その目元がわずかに赤らんでいるのは、誰の目にも止まらなかつた。

「ごめんごめん。……けどさ、なんか瀬島って最近、ちよつと女っぽくなつたつうか、色っぽくなつたって感じじゃね？」

「信じらんない！ ぶつかつといて、何セクハラ発言してるのよ!？」

当事者のゆかり本人をそつちのけにして始まつた言い争いをよそに、無口な少女は黙つ

てもじもじと小さく腰をよじらせる。

クラスの中では、どちらかと言えば地味な方だ。

校則を守ってカラーリングもパーマもかけていない黒髪をおかつぱ風のショートボブに整え、小柄な身体に夏服に替わったばかりのセーラーの制服をきちんと身に着けている。

容貌も体格にふさわしい童顔で、黒目がちな瞳と柔らかそうな頬、桜貝のような唇は、年頃の少女の美しさというよりは童女の愛らしさに近しく感じられるものだ。

所属しているクラブは文芸部で、いつもうつむきがちで大人しく本を読んでいる様子は、見る者にいかにも儂げな印象を抱かせた。

しかし、そのいたいけな少女の顔に、今わずかだが確かな欲情の血の色が上っている。少年の掌が首筋の敏感な部分をかすめただけで、小さな身体の奥深くに熱く脈打つ熾火おきびのような官能が生まれていた。

制服の下、周囲よりもだいぶ発達が遅い、自分の掌でさえすつぽりと覆えそうななだらかな乳房の頂点で、鶉色とぎいろの突起が硬さを増す。

スカートに包まれた腰は、少年が指摘した通りここ数ヶ月で女らしい豊かな丸みを帯びてきているのだが、その中心の淡い茂みの奥で、粘膜の襞が何かを期待するようにひくひくと小さく震えて甘酸っぱい臭いの媚液をわずかに滲にじませていた。

——私の身体、もう、自分でもどうしようもないくらいにいやらしくなってる——

ゆかりは、自分の秘裂からこぼれそうになった蜜の香りが周囲に気付かれはしなかったかと、そつと視線を教室内に巡らせた。

先ほどゆかりとぶつかった少年とその仲間たちは、すでに彼女への関心を失っている。かすかな体液の臭いは、幸い教室内の人いきれに紛れて誰も気にはしていないようだったが、少女の顔はふと一人の少年と目が合った事で動きを止めた。

一瞬の後、その少年、柳木邦弘やなぎくにひろは暗い目つきのまま顔をそむける。

無言の意思表示に、ちくりとした痛みを小さな胸に感じつつ、

——いいの、これで。私には、もう、普通の学園生活なんて送れないんだから……。

そつと吐息をついたゆかりが、再び窓の外に目をやろうとした時だった。

「……二年B組の瀬島ゆかりさん、至急来賓室まで来てください。繰り返します。二年B組の瀬島ゆかりさん、至急来賓室まで……」

教室のスピーカーが、低く歪んだ音で彼女の名前を呼んだ。

この学園には、一つ、密かに受け継がれてきた慣習がある。

世間的には、伝統がありながらも、自由な校風を持つ学園として知られていた。中にはその校風に甘えてしまい、多少羽目を外しがちになる生徒たちもいないのではないのだが、教師たちの熱心な指導の甲斐もあってかこれまで大きな問題は起こっていない。

……だが、それが表面上の姿であり、対外的な理由に過ぎないという事を、学園の中のある者たちはよく知っていた。

「失礼、します」

ノックの後、おずおずとゆかりは来賓室の重厚な木の扉を開いて中に歩み入った。

教師に呼び出されるような事をした覚えは、少なくとも表向きにはまったくなくない。また、そんな場合でも呼ばれるとしたら職員室か生徒指導室で、来賓室などという事は考えられなかった。

——『あの事』に関係あるのかな。

考えられる理由は、一つしかない。

高価な調度を整えた室内のソファには、一人の太った老人が身を沈めていた。その側に教務主任の教師が控えるように立っている。

「……評価も上々で、私も鼻が高いよ。これも君たちの努力の賜物かな」

「いえ、理事の皆様からおあずかりしている、伝統あるこの学園の名を汚さないようにするのが私どもの務めですから……」

交わされていた二人の会話を耳に挟んで、ゆかりは老人がこの学園の理事長である事を思い出していた。校外にも役職を持っているため、いつも校内にいる訳ではなく、入学式や卒業式といった式典の他にはたまに視察に訪れる程度と聞いた事がある。

「ああ、来たか。君が瀬島君だね」

「はい」

ゆかりの入室に気付いた教師が声をかけた。同時に理事長も彼女に目を向ける。ねつとりと脂ぎっているようなその目つきに、少女は本能的な嫌悪感を抱いた。

「ほう、君が今の『担当者』かね」

老人の視線が、ゆかりの細身の肢体を上から下まで舐め回す。

「初々しそうな、なかなかの美少女じゃないか。くふふ。こういうタイプが『担当者』になるのは珍しいな。しかし、悪くない」

こもった含み笑いを漏らす理事長に、教師は媚びるような笑みを向けた。

「お氣に入って頂けたようで何よりです。君、早く理事長に『ご挨拶』をしなさい。意味は分かるな？」

「……はい」

——やっぱり。

ゆかりは、諦めと共に胸元のタイを解き始めた。

この学園の、闇の慣習。

それは、代々一人の女生徒が、人知れず学園の不良グループの性奴隷となる事で、一般の生徒たちに手を出させないようにするという生け贄の伝統だった。

教師たちも共謀して行われている学園ぐるみの企みは、奴隷にされた女子が卒業する時に次の担当を選び、『引き継ぐ』事で脈々と続けられてきている。学園の平和、名門たるその評判は、無数の少女たちの犠牲の上に築かれたものだった。

ゆかりがこの春にその役目を受け継ぐ事になったのは、半ばイレギュラーな事故のような理由によるものだったが、幾つかの事件を経て、今の彼女はすでに従順なセックス奉仕者としての自分を受け入れている。幼い外見とは裏腹に、男に軽く触れられただけで発情し、濡れそぼつ雌芯は、毎日のようにその中に大量の精液を注がれ続けた結果だった。

——この人も、先生たちも、みんな、私がいやらしい目にあわされるのを当たり前だと思ってる。

理不尽な運命を恨む気持ちは、もう失いかけている。たった一つ、淫獄に落とされてからの自分を支えてくれていた優しい笑顔の面影が心の奥底に残っていたが、それすら現実にはもう見る事は叶わないものだった。

「二年の、瀬島ゆかりです。私の身体でよろしければ、好きにお使いください……」
下着姿になった少女は、醜悪な老人の前にひざまずくと、ズボンの前ファスナーをゆつくり下ろし、中からしなびた陰茎を引き出す。

老人の持ち物は、ゆかりが手や口で奉仕を加えても、なかなか力を取り戻さなかった。懸命ではあるが技術的には拙い愛撫に苛立った男は、やがて白く細い肩を手荒に突き飛

ばした。短い悲鳴を上げて床に尻餅をついたゆかりに、理事長はそのでっぷりと太った身体を覆い被せてくる。

「もういい！ そんな手付きでは満足できん。私が自分で好きなようにさせてもらう」

老人特有の埃臭いような体臭が鼻を刺し、ぶよぶよとして張りのない肉が自分の身体を包むのを感じて、ゆかりは反射的にもがいて逃れようとする。嫌悪に歪められたその表情を見て、垂れ下がっていた理事長のペニスがむくむくと勃ち上がってきた。

勢いのままに、肥満体の老人は少女の肢体をまさぐり、ブラをたくし上げて膨らみかけの小さな乳房をきつく握りしめた。同時に、もかく下半身を強引に手の力で押さえつけると、シヨーツも引き千切らんばかりの勢いでずり下ろす。

「ひ、ひいっ！」

もはや『奉仕』の枠を越えて単なるレイプになろうとしている行為に、ゆかりは怖氣をふるって身をよじらせた。身体を汚されるのは日常の事とはいえ、老人の執拗で粘着質な手付きには、少年たちにむき出しの性欲をぶつけられるのはまた違った生理的な気持ち悪さと呼び起こすものがあつた。

わずかな布切れだけを身にまとわせた半裸の少女が大きな瞳に涙を浮かべて息を喘がせる様子に、理事長は興奮を隠そうともしない。

老人斑の浮いた枯れ木のような男根は今や完全に勢いを得て、年若い娘の瑞々しい秘裂

に突き込まれる瞬間を待ち受けるようにびくびくと震えている。

腿を抱え込むように脚を持ち上げられ、小さく口を開いた恥ずかしい部分にぬちゃりと膨れ上がった勃起の先端を突き当てられると、ゆかりの唇からは

「あ……、んやあ……っ！」

と戸惑うような、拒むような声が漏れた。

「くふふ……。そうか、そんなに嫌か？ 私のような年寄りに身体をおもちゃにされるのは、そんなに我慢できないか？」

「……！」

——そうだ。私に、嫌がる権利なんて、ないんだ……。

含み笑いと共に耳元で囁かれた台詞を耳にして、ゆかりは一瞬身をこわばらせた後、おぼろげと力を抜く。同時に、まだ十分潤ってもいない小さな襷をぎちぎちと掻き分けながら、老人の肉竿が少女の秘所に押し入ってきた。

理事長の男根で貫かれた時には、ゆかりはもういつもの自分の役目を思い出していた。

「うくっ、あつい、のが、はいつて、きますう。ああはあんんっ！」

白い喉をのけぞらせて上げた声は、わずかながらも艶を帯び始めている。

「そら、どうした、もっと鳴いてみせろっ！」

少女の小さく丸い尻を上から押さえつけるようにして、老人はその肥満体にふさわしい、

ねっとりした腰使いでゆかりを責め始めた。

膣内を蹂躪する肉槍は、その長さも硬さも普段相手をしている少年たちや中年の教師のものに比べれば大したことはない。

しかし、なぜか彼女は、まるでこの世ならぬ地獄から這い出でた怪物に犯されているような、正体の知れない嫌悪感を覚えていた。

——気持ち、悪い。どろどろした、臭い粘液に包まれているような——

「あ、ああんっ、もつとお！ もつと、奥までくださいっ！」

違和感を振り払うように、ゆかりは尻を突き上げながら卑猥な要求を口にする。狂つてしまえば、堕ちてしまえば何も感じられなくなる。それは、奴隷として扱われる日々の中で少女が得ていた、唯一の自衛策だった。

だが、幼い外見の女生徒が官能の印を表すほどに、老人は不機嫌になっていった。

小さな乳房を揉みしだいて先端の突起を執拗に弄び、抉るように、こねくるようにペニスを押し付けながら、ゆかりの嬌声にむしろ興が削がれたといった風に顔をしかめる。

「ふん、どうやら、私が思っていたほどに初心な娘ではなかったようだな。この学園の生徒の質も落ちたものだ。……おい君、どうにかならんのかね」

大きな瞳を半眼にし、わずかに開いた唇から喘ぎ声を漏らす少女の身体を貫いたまま抱え起こしながら、理事長は彫像のように隣に控えていた教師に声をかける。

初老の教務主任は、しばしの間何事かを考え込んでいたが、「一つ、試せそうな事がございます。少々お待ちください」ソファに腰を下ろした老人に一礼して、部屋を出ていった。

——なん、で、怒ってるん、だろう。この、人。

両脚をM字に拡げて抱えられ、粘液にまみれた結合部を露わにした姿勢で、ゆかりは身体を上下に揺すられている。

ソファに座ったまま、背面座位の姿勢でつながっているのだが、老人の太った身体には歳に似合わぬ力があり、小柄な少女の肢体は軽々と扱われていた。

普段、不良少年たちの相手をする時は、卑語を口にしながら扇情的に性器を拡げてみせれば、男たちは我を忘れてペニスを押し込み、がむしやりに動いては果てていった。だから今日も、理事長に奉仕をするよう命じられて精一杯いやらしい態度を取っているのだが、どうやらそれが逆に彼の不興を買ったようだった。

——でも、それなら、どうすれば……？

ぼんやりと思いながら、半ば無意識に教え込まれた通りきゅつと膣を締めた時だった。

「失礼します」

来賓室に教務の教師が再び入ってきた。そして、戻ってきた彼は一人ではなかった。教

師に続いてドアをくぐり、部屋に入ってきた人物の顔を見た瞬間――。

「いやあああつ！　なんで？　なんで柳木くんがここに来るのっ!!」

ゆかりはそれまでの従順さが嘘のように激しく身をよじって肌を隠そうとした。が、がっしりと腕ごと深く腿を抱え込まれた身体は動かす事もできず、ぱっくり開いて濡れた桃色の褻を覗かせる秘所が勃起した男根を根元まで啜え込んでいる様子を来訪者の目の前に存分に見せ付けてしまう。

「これって……」

一方で、教師と共に室内に入ってきた男子生徒、ゆかりのクラスメイトである柳木邦弘も、室内の異様な光景に絶句して立ちすくんでいた。

豪華なソファにでっぷりと太った醜い老人が腰掛け、その股間からそそり立つたペニスで全裸の女子生徒の媚肉を深々と貫いている。少女の白い裸身は、まるで磔はりつけのように両手を拵はらげて押さえ込まれ、ささやかな膨らみの二つの乳房も、もやもやとした淡い陰りが覆っているだけの柔らかな恥丘も、全て少年に見せ付けるように前に押し出されていくのだった。

「き、君は、こんなところでも……」

「違うのおっ！　いやあ、見ないで、柳木くん、私を見ないでえっ！」
ぼろぼろと透明な涙をこぼしながら、ゆかりは哀願する。

かつて邦弘は、ゆかりの事を想っていた。学園の雄集団に闇の性奴隷として扱われる日々の中、少年の誠意に惹かれた彼女もまた、その想いに応えようとしたのだが、そんな二人のささやかな恋情は凶漢たちの悪意にあっさり踏みにじられた。

放課後の教室で精液にまみれ、幾人もの男の肉茎に狂わされるゆかりを見せられた邦弘は、促されるままに自分自身も彼女を犯し、その身体に欲望を吐き出してしまったのだ。

それ以来、邦弘は一度もゆかりと言葉を交わしていなかった。

「やめて、ください。こんなの、ひどすぎます……」

だが、幼い身体を淫辱に染められながらも、心までは純真さを失っていない少女にとつて、彼が以前に示してくれた優しさは忘れられるものではなかった。もう振り向いてもらう事は叶わなくても、わずかな笑顔の思い出だけを大切にしていくつもりだった。

——柳木くんが、また私を見てる。人形みたいにあそこを開かれて、おもちゃにされる私を。どこでも身体を差し出す、淫乱だつて思つてる！

どんな目で自分を見られているのか知るのが怖くて、ゆかりは前を見る事もできない。「くふふ……。そうだ、これがたまらんだ！ それ、もつと嫌がれ、もつとあがけ！」

じたばたと暴れる少女の抵抗を抑え込みながら、肥満体の老人は分厚い唇から涎をこぼさんばかりにして歓喜の言葉を口走った。

「その男は君の交際相手か？ いかんなあ、学生の方で不純異性交遊は！ 子供は黙っ

て大人に従っておれ！ くふ、ああ、いいぞ！」

がさついた皮膚で覆われたペニスが膣内でぐつと一回り膨らんだような気がして、ゆかりはまた粘ついた嫌悪感に鳥肌を走らせる。

だが、その意思とは裏腹に、男を喜ばせるための動きを覚えこまれた嬖は蜜を滲ませながら枯れ木のような肉槍に絡みついていた。逃げるための身体の動きは、腰の部分で微妙なうねりとなって陵辱者にさらなる快感を与えてしまっている。

「おおっ！ くるぞ！ くる、きたっ！ そら、男の前で私の子種を受け入れろっ！」

腰を弾ませながら、老人は腕でゆかりの身体をかくがくと揺さぶる。何回も迎えているはずの汚濁の瞬間が、邦弘に見られている事で耐えられないほどの恥辱に感じられた。

「やめてえっ！ 出さないで、私の中を汚さないでええっ！」

嘆願に耳も貸さず、ぶるっ、と理事長がその太った身体を震わせる。一番下まで押し付けられた少女の下腹部の中で、肉塊が脈打って大量の精液を吐き出した。

「あああ……、出てるう……。びくびくって、動いてるっ……」

顔を覆う事すらできないで、ゆかりはただ泣いていた。

邦弘の目の前で、少女の身体が持ち上げられ、開いた結合部の隙間から粘度の高い白濁の液体がどろりとこぼれ出す。

来賓室に脚を踏み入れ、ゆかりが老人の陰茎に貫かれている光景を目撃した最初の衝撃が覚めると、邦弘の胸には鋭い痛みが襲ってきていた。

少女が涙を流すのは、ただ犯されているからではないという事が、彼には分かる。この少女は、男たちが劣情を吐き出すための肉欲奴隷という立場をすでに受け入れてしまっている。今、彼女が苦しんでいるのは、自分がこの場において、その身体が汚される様を見ているためなのだった。

かつて、事情も知らず欲望のままにその胎内に精液を吐き出し、それきり顧みる事になった自分が。

(泣かないでよ、ゆかり。俺は、どんなになっても、やつぱり君の事が……)

その胸の痛みは、邦弘に自分が今でも彼女を好きだという事を気付かせていた。

「くふふ……。いいぞ、こうでなくてはいいかん。おお、また力が戻ってきたわ！」

少年と少女の悲嘆をよそに、学園の絶対権力者が喜悦の声を上げる。

(あんなぶよぶよの身体の年寄りなのに。ゆかりのあそこに刺さったまま、また勃つてきている。お腹が膨らむほどでかくなってる！　くそつ、怪物が！)

「どれ、今度は後ろから味わってみるか」

邦弘の内心で罵倒されていても知らず、完全復活に満足した男は、腕の中に抱えた少女の肢体を無造作に前に放り出した。

この場を抜け出し、早く邦弘の声を聞きたいと思った。

「用意はいいな。スタート！」

陣内の掛け声と共にプールの壁を蹴り、無我夢中で手足を動かす。

どのくらい進んだかも分からないうちに、男の声と、水しぶきが上がる音が聞こえた。後ろを見たくなる衝動を振り切って、小柄な少女は細い腕に一層の力を込める。やがて薄暗い水の層の向こうに、プールの壁がぼんやりと見え始めてきた。

——あと、ちょっとで！

焦りの中、わずかな安堵が心にきざした時だった。

ゆかりの耳に、水の流れる音を圧して野太い歓声が飛び込んでくる。

一瞬の後、前に伸ばした腕ががくりとその動きを止めた。

違う。腕だけではない。ゆかりの身体全体が、前に向かう動きを止められていた。

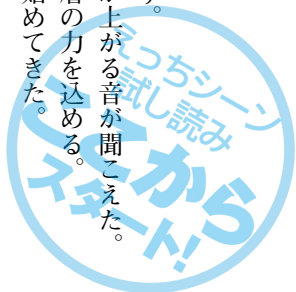
「ごぼっ！」

泳ぎのリズムが崩れ、息継ぎのタイミングが狂って一瞬水を吸い込んでしまう。

「ははあっ！ 捕まえたぜ、ゆかりい！」

パニックに陥りながら周囲を見回した彼女は、自分の足首を掴んでギラギラと目を光らせる少年の姿に何が起こったかを悟った。心が、黒い絶望で塗り潰されていく。

「ここなら、濡らす必要いらねえよなあ」



前髪からぼたぼたと水を滴らせながら、男はゆかりの身体を後ろから抱きすくめた。

「こ、『んっ』って……。やだっ！　せめて、せめて上がってからにして！」
「うるせえ！」

太い指が水中で水着の股間をごそごそとまさぐるのを感じて、少女の背中に怖気が走る。願いも空しく、異形の水棲生物のようなそれはクロッチの部分ぐいと横にずらし、慎ましやかな秘裂を塩素の強い水中に直接さらけ出した。

直後に、冷えた皮膚を焼くように熱い塊が押し入ってくる。

——なんなの、これ！　気持ち悪いっ！

挿入と共に、腔内に水が流れ込んできていた。胎内に得体の知れない液体を満たされ、薄い膜一枚を隔てて異物が動いているような違和感がゆかりに悲鳴を上げさせる。

「すげえ！　あいつ、水ん中で始めやがった！」

プールサイドから野卑な応援がかけられて、その声に応えるように少年は水の抵抗をものともせず腰を振り始めた。

「やつ！　こんなの、嫌あ——っ！」

ゆかりはまるでまだ泳ぎ続けているかのように両手で水をバシャバシャと掻く。が、男と性器で結合し、水中でがっちり水着の腰を押さえつけられている身体は、当然のように一センチたりとも前に進む事はなかった。

「中に水が入って、ヒダが締め付ける感じは味わえねえけどよ。コスプレもののAVみていで悪くねえな、こういうのも」

最初に追いついただけあって、逞しい身体をしたいかにも運動の得意そうなその少年は、すぐに水中で行うセックスの動きに慣れてきたようだった。ゆかりの小さな肢体をピストン運動で連続して下から突き上げる。浮力で軽くなっている身体は、その腰の動きだけでたやすく浮き沈みを繰り返した。

「あつ、あつ、あつ……。ひゃああんっ！」

腰だけでなく膣奥まで剛直の先端で突き上げられて、水面に広がる波紋のように少女の胎内にも淫感の波が繰り返し打ち寄せる。

いつの間にか、男の手は腰から離れていた。秘裂を貫かれた一点だけで身体を支えられ、水中で身を弾ませる不安定な体勢に、思わず後ろの身体に脚を絡め、ぎゅっと媚肉を締め上げてしまう。押し入った肉幹の熱を、それまでよりもはっきりと感じた時だった。

「うおっ！ 締まるっ！ くうっ！」

肉壁の間に入り込んだ水を押しのけて、粘度の高い煮えたぎるような液体が拡がった。

「はああっ！ 熱い！ あつういいっ！」

水着の背中をのけぞらせるゆかりの中で、精を放った勃起はそのまま二度三度としゃくりあげて雄汁を立て続けに注ぎ込む。

膺内で、冷たい水と熱い体液が入り混じる異様な感触に呆然とする少女から、ずるりとペニス引き抜かれた。そのまま水着を元に戻され、プールサイドに引き上げられる。

——だめ、だった。やっぱり、犯されちゃったよ、柳木くん……。

男たちに両脇を抱えられるようにしてスタート地点まで戻されたゆかりに、陣内がたりと笑いかけた。

「惜しかったな、瀬島。次はがんばれよ」

次に獲物を追う男たちは、目を爛々らんらんと輝かせて少女の肢体を舐め回すように見ている。

「い、いやあ……。も、もう、無理です、こんなの……。」

ゆかりはがくがくと震え、目に涙を浮かべて訴えた。

下腹に交合によるじんじんとした悦痺れが残っている。股間の三角形の布の底には、胎内から垂れた精液が溜まってにちゃりと不快な感触を伝えていた。こんな状態で、さつきよりもまともな泳ぎなど、できるはずもなかった。

「文句を言うな。嫌なら、今日はその格好で家に帰らせるぞ！」

「あ、あああ、あああうっ……」

まるで処刑台に向かう罪人のように、水着の少女はふらつく足取りで水面に向かう。

今度は、ゆかりはプールの半分すら泳ぐ事はできなかった。

夏休みに入り学園に出入りできなくなっても、しばしば不良たちの溜まり場で性欲奉仕させられる状況は続いていたが、ゆかりは彼らの目を盗んでは密かに邦弘と連絡を取って励ましあっていた。

その心の支えもあつてか、一時期暗く沈んでいた彼女の瞳には、再び光が戻ってきているのだった。

夏休みのある一日、その日は登校日。

久々に邦弘の顔を見る事ができて、ゆかりは心の中で小さな喜びを噛み締めている。

登校日と言っても特別にやる事がある訳でもないのです、簡単な全校集会とクラス単位のHRを行っただけで、日程は午前中で全て終わった。

解散後、帰ろうとしたゆかりが鞆を手に廊下に出るのとほぼ同時に、携帯にメールの着信が入る。画面を開き、本文を確認した少女の表情に陰りがさした。

——やっぱり、来ちゃった。

本当は内容を見るまでもなく、差出人の名前だけで用件は分かっている。不良少年のリーダー格の一人から来たそのメールは、今日もいつもの教室でパーティーを行うから、後二時間ほど待って校内から生徒の姿が消えたら来いという命令だった。

——でも、今日こそ計画がうまくいくかも、しれないんだし。

肉欲奴隷として野卑な雄たちの欲情に奉仕する恥辱も、その先に解放される望みがあると思えば我慢できる。ゆかりはいつものように、邦弘にそのメールを転送した。こうしておけば、その時間に合わせて彼が教室内の様子を録画してくれるはずだった。

それからしばらく経った後。

「……………」

無人の文芸部室に移動し、適当に本などを読んで時間を潰しながら、ゆかりはふと疑問を感じた。普段なら必ずくれるはずの、邦弘からの返信メールが来ていないのだった。

思い返せば、HRが終わって解散した後、自分が帰ろうとした時にはすでにその姿は教室の中から消えていたような気がする。

——二学期にはいろいろと行事が多いから。生徒会の仕事も忙しいのかもしれない。メールか電話で彼と連絡を取りたいという誘惑を押さえ込み、ゆかりは再び一人陵辱の時間を待ち続ける事にした。

「ああ、来たね、瀬島君」

ゆかりが指定された時間に校舎の隅の教室を訪れると、そこにはいつもの不良少年グループの他に、陣内を始めとする男性教師たちも数人顔を揃えていた。中には、理事長に自分の身体を差し出し、邦弘を立ち会わせて耐え難い辱めを与えた教務主任の初老の教師ま

で混じっている。

——やった。これで、後は、うまくこの人たちの顔が撮れるようにすれば！

ゆかりは、内心の興奮を表情に出さないようにするのに苦労した。あくまで従順な、男たちの欲望のままにその肢体を差し出す少女性奴として、弱々しく震える声で教え込まれた通りの言葉をその小さな唇から紡ぎ出す。

「みなさま、今日もゆかりを犯すために集まって頂き、ありがとうございました。私のおま○こも、口も、おしりも、全部みなさまの逞しいおちんぼで征服してください。お好きにだけ、熱い精液を注ぎ込んでください……」

言いながら、ゆかりは制服を脱いでいった。

上着、スカートから下着まで全て脱ぎ、生まれたままの姿で胸と股間を覆って立ち尽くすと、夏の半日を過ごしてうっすらとかいた汗が少女の甘い体臭をあたりに撒き散らす。

対照的に、彼女を取り巻く男たちの周囲にはほとんど獣臭と言えるほどの生臭い空気が立ち込めていた。欲望に満ちた呼気、汗、そして早くも生殖器の先端から滲ませている先走りの体液の臭いが入り混じった、胸の悪くなるような濁った空気だった。

「君たちは休み中も外で彼女を抱いているんだらう。今日は我々が優先だな」

慌ただしく服を脱ぎ捨てながら、中年から初老までの教師たちが皮膚の弛んだ裸体を晒して前に出てくる。生徒を犯すという禁断の快楽に酔っているのか、白髪交じりの陰毛の

中から突き出しているものは、皆すでに極限まで膨らんでひくひくと震えていた。

「へへっ、おっさんどもが張り切ってんじゃねえよ」

日中の学園では訳知り顔で自分たちを抑えつけている男たちが、理性の仮面をかなぐり捨てて雌に群がる姿を不良生徒は嘲笑う。しかし、言いつ分に納得はしているのか、それとも発育途中の少女が醜悪な中年男に汚される姿を高みの見物でもするつもりか、とりあえず一番手は譲る事にしたようだった。

「お前は胸もケツもまだまだだが、ここの感触だけはなかなかのものだな」

ゆかりの目の前に陣内が立ちほだかり、顔に巨大な肉筒を突きつけてきた。

「つぶ、んちゅう……」

何も言われなくとも、全裸の少女は膝をついて両手で睾丸と竿を捧げ持ち、桃色の小さな舌とぷっくりした唇でてらてら光る亀頭をついばむように可愛がり始める。

ちゅっ、ちゅっ、と吸い付く音が響くたびに、ごつい顔の中年男がぴくりと一瞬眉根を寄せるのは、傍から見ていると滑稽な眺めですらあった。

「では、私はこちらを。ふふ、君が理事長に犯されているのを見た時から、いつか私も君を組み敷いてみたくてたまらなかつたんだよ」

教務主任の教師が、ぞろ、と日焼けしていない白い背中を這わせながら、右手を丸く張り詰めた尻肉の谷間に差し込んだ。指先で柔らかな縮れ毛に囲まれた谷間をなぞると、

にちゆりとかすかな音と共に粘膜の襞がほころびだしてくる。

「やあんっ……。い、いきなり、そんなぁ、やめてください」

思わず陣内のペニスから唇を離し、ゆかりは甘い声を上げた。

しかし、言葉の上では拒絶しているように見せながら、姿勢は膝立ちから徐々に腰を後ろに突き出し、男を受け入れる態勢を整えていく。やがて前の男の剛直を口にしたまま、脚を伸ばして腿を開くと、中心の秘苑はすでにぬめる蜜でべとつくほどになっていた。

「ふ、ふふ。まだ子供のような身体なのに、ここはもうたっぷり濡らして、なんていやらしいんだ。けしからん、まったくけしからんな」

うわ言のように呟きながら、初老の教務主任が瑞々しい尻の肉果実を鷲掴みにして自分の分身を後ろから媚粘膜の隙間に埋めていく。ぶじゆりという濁った音が響いた。

前後から男の肉槍に貫通された少女は、くなくなどその細い腰を振って自分の感じている快感を表してみせる。

「気持ちいいのか、そうか、ここがいいのか？」

「もっと舌を使え！ 強く吸い込め！」

まだ十分に男を受け入れられるとは思えない未成熟な肢体の少女が、二人の大人の男の欲情を好き放題に叩き付けられては苦しげに喘ぐ。

しかし、無惨にも見えるその様相に反して、ゆかり自身の女体はすでに苦痛よりも快楽

の方を強く感じるようになっていた。いやむしろ、喉に生臭い生殖器を捻じ込まれ、秘裂の柔襲を繰り返し抉られて苦痛を与えられるほど、乙女の下腹奥深くに秘められた子宮が疼いて肉悦の波動を響かせていく。

この半年で、無垢だった少女の身体はそこまで調教されてしまっていた。

——いけない。ちゃんと、場所を考え、ないと。

ゆかりは、目だけでちらりとカメラが仕掛けられているはずのロッカーを流し見る。

男たちの位置を調節して、自分を犯している様子が映るようにするために、官能に我を忘れてしまつては駄目だった。だが、男たちをその気にさせるための扇情的な振る舞いは、確実にゆかり自身の性感をも普段以上に昂らせている。

「ちゅばっ、むぷっ、じゅろろっ！」

「う、ぐうっ！」

柔らかな口内粘膜と舌による愛撫で、まず陣内が達した。唾液に濡れて黒光りする太茎が痙攣するように震えて少女の口に大量の濁液を流し込む。苦しうに喉を鳴らしながらもそれを全て飲み下し、力を失ったペニスを丹念に舐めしゃぶって吐精の跡を清めたゆかりは、股間の媚裂に感覚を集中して男の快感をさらに引き出そうとした。

後背位で肉棒を受け入れたまま、蜜壺をきゅうつと締め付けながら背中を波打たせ、丸く張り詰めたヒップを男に押し付けると、初老の教師はぜいぜい見苦しく喘ぎながら狂っ

たように腰を振る速度を上げる。

「あうんっ！　せ、せんせえっ、しゅごひい、でひゅう！　そこ、ずんずんってえ！」

悦楽に濡れた声は、もう完全に演技ではなくなっていた。膣奥にこわばりの先端が食い込むたびに脳裏に散る白い火花に意識を霞ませながら、ゆかりは別の教師の男根に取りつきざまに、なんとか身体をロッカーの方に向ける。これで、生徒である自分を獣のように押さえつけて犯す教務主任の姿がカメラに収められるはずだった。

しかし、そこから先は、少女自身も肉悦の渦に飲み込まれてしまう。

「あはあ。あちゆいのお、いろいろお。これも、ゆかりに、ちようらい！」

臨戦態勢のペニスを小さな掌で扱きながら、性奴少女は自ら陵辱を望むかのような言葉を口走った。目鼻立ちはまだあどけない顔が、瞳は快楽に潤んで頬には赤く血が上り、背徳的に妖艶な表情を作り上げていた。

「うおう！　な、膣内の肉がうねって、吸い込まれ……」

背後で苦しげな声上がる。男に限界が近づいている事を悟ったゆかりは、肉襷の一枚で丁寧な固い幹を、敏感な先端を包み込み、撫で上げるようにイメージした。

「んぐあっ！　出るっ！　こ、この私が、生徒に、生で中出しいいいっつ！」

禁断の行為にうわずった声と共に、初老の教師が射精する。その興奮を映すかのように、肉壺に注がれる精液は大量で勢いも激しかった。

子宮まで熱で満たされる感触に、ゆかりも今日最初のアクメを迎える。

ロッカーに向かつて、少女は口の端から涎が垂れるのも構わずに、蕩とうけた顔を振りながら唇を開いて絶頂を告げた。

「ひゃあああ！ あひゅいひゅい！ ねばねば、どぴゅどぴゅ、きちやうのお！ せ、せんせへえにしやせえされてえ、ゆきやり、イツちゃいまひゅううううううう！」

少女の小さな尻にしがみついて、男は最後の一滴まで胎内に注ぎ込む。ゆかりは熱い息を吐きながら腰を突き上げ、その全てを受け入れようとした。

「……ふう。たまらないな。可愛い顔をして、恐ろしい娘だよ、君は」

萎え始めたペニスをなお未練気に秘裂の中でゆつくり前後させながら、教務主任はゆかりの汗ばんだ肌を撫で回す。その顔が、ふと何かに気付いたように横を向いた。

「おいおい、撮るのはいいが、私の顔は映していないだろうな」

悦楽の忘我から、徐々にはつきりしてきた意識に彼らの会話が滑り込んでくる。妙に気になったその言葉にゆかりが顔を上げると、不良少年の一人が彼らの交合をビデオカメラで撮影しているのが目に入った。

もちろん望ましいはずはないが、陵辱の様子を撮影されるのは今に始まった事ではないので、撮られる事自体は諦めていた。彼女の心に引っかけたのは、使われているのがいつものような携帯ではなく、専用のビデオカメラである事だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>